

『万葉集』3 - 460

七年乙亥、大伴坂上郎女、悲嘆尼理願死去作歌一首〈并短歌〉

■角乃 新羅国従 人事乎 吉跡所聞而 問放流 親族兄弟 無国尔 渡来座而 大皇之
敷座国尔 内日指 京思美弥尔 里家者 左波尔雖在 何方尔 念鷄目鴨 都礼毛奈吉
佐保乃山辺尔 哭児成 慕来座而 布細乃 宅乎毛造 荒玉乃 年緒長久 佳乍 座之物
乎 生者 死云事尔 不免 物尔之有者 憑有之 人乃■ 草枕 客有間尔 佐保河尔
朝河渡 春日野乎 背向尔見乍 足氷木乃 山辺乎指而 晚闇跡 隠益去礼 将言為便
将為須■不知尔 俳■ 直独而 白細之 衣袖不干 嘆乍 吾泣涙 有間山 雲居輕引
雨尔零寸八

七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願が死去れるを悲しび嘆きて作る歌一首〈并に短歌〉

■繩の 新羅の国ゆ 人言を よしと聞して 問ひ放くる 親族兄弟 無き国に 渡り来
まして 大君の 敷きます国に うち日さす 京しみみに 里家は 多にあれども いか
さまに 思ひけめかも つれもなき 佐保の山辺に 泣く児なす 慕ひ来まして 布細の
宅をも造り あらたまの 年の緒長く 住まひつつ 座ししものを 生ける者 死ぬとふ
ことに 免かれぬ ものにしあれば 憑めりし 人のことごと 草枕 旅なるほとに 佐
保河を 朝川わたり 春日野を 背向に見つつ あしひきの 山辺を指して くれくれと
隠りましぬれ 言はむすべ せむすべ知らに たもとほり ただ独りして 白■の 衣手
干さず 嘆きつつ わが泣く涙 有間山 雲みたなびき 雨に降りきや